

日本国際情報学会

ニュースレター 2014年3月号

特集 「今年、将来はこうなる」



ここ数年、国内では地震、水害、竜巻、海外でもフィリピンの台風や米国の大寒波などの自然の猛威にさらされる災害が続発し、多くの被害や犠牲者が出ている。以前はあまりなかったような大災害が立て続けに、しかもこれまでより規模が大きく過酷になっている。過去の経験に学ぶだけでは予測しづらく、万全な対策を取るのも難しい。

外交面でも、一昨年から悪化し始めたわが国と中国、韓国とは、新たに就任した習近平国家主席、朴槿恵大統領との首脳会談が未だ行われないう異常事態が続く、険悪の度を増している。特に尖閣諸島に防空識別圏を設定した中国とは緊張が高まり、偶発的な軍事衝突が発生しないか、世界中が懸念している。

平成24年12月に安倍晋三政権が発足し、アベノミクスの効果により株価は上昇、国内経済は回復基調にある。その一方、株価は乱高下を繰り返して安定せず、4月からの消費税率値上げもようやく回復の兆しを見せている経済の腰を折らないか、不安材料に事欠かない。国際経済の成長を牽引してきた中国の経済成長の減速は次第に鮮明になり、シャドーバンクのデフォルトによって経済が混乱する恐れや、今年中にも不動産バブルが崩壊するという観測もある。一寸先を予測することすら容易でない。将来は絶対こうなる、なんて怖くてとても言えない。

それでも将来を見据え、間違いない未来を選択する努力は必要だ。目先のことにはばかりに囚われず、将来のこと、子々孫々までが安心できる社会を築くには、能う限りの情報を収集、分析し、最良の選択に努めることが、今を生きる我々の責務だろう。

調子に乗って偉そうなことを言ってしまったが、年が明けてはや2か月が経った。依然、先が読めない情勢が続いているが、今年最初のニュースレターということで、「今年はこの先どうなると思いますか。また、将来はどうあるべきですか」と問いかけ、本学会員に寄稿をお願いした。

我が学会は研究職以外の職業を生業にしている研究者が多く、その職業も実に様々である。専門性の高い職種も多く、我が学会ではその職業や技術に精通していなければ知り得ない情報に日常的に触れ、それぞれの分野を先導する人材を多数擁している。

しかしながら、執筆にあたっては専門分野にこだわらず、政治経済などの専門的なことでも、破天荒な未来予測でもなんでも結構！と、細かなテーマ設定は執筆者各人にお任せした。あまりに漠然とした依頼に、執筆を快諾して頂いた方々もテーマ設定に相当苦勞されたのではないかと思う。その結果、みなさんの個性そのままの面白い主張が展開された。賛否両論共に結構。一編一編を読者諸賢の議論の検討材料にして頂きたい。

目次：

2014年に向けて ～私たちにとって最も大切なものを失う ことがないように～	2
沈黙の効用	4
生命倫理と脱原発の これから — 進歩する科学技術 との共存には冷静 に判断を—	6
電子書籍の未来	8
軍の操り人形となっ た金正恩	11
編集後記	12

2014年に向けて

～私たちにとって最も大切なものを失うことがないように～

日本大学大学院国際情報専攻 修了生 内山 幹子

このニュースレターをお読みの皆様は、2014年をどのような年にしたい、あるいはなつて欲しいとお考えでしょうか。昨年2013年8月に、1990年代に私と一緒に仕事をしていた、豪州の女性が病気のため47歳で他界しました。もちろん、彼女、家族、私にとっては、予期しなかった、早すぎるできごとでした。そのため、2014年を想うと、予期せずに失う命がない、少しでも少ない年であつて欲しいと願っています。このような視点から、2013年を振り返り、2014年について考えてみました。

1 2013年を振り返る

2013年12月30日付朝日新聞13面から15面にかけて、2013年の主なできごとが掲載されています。この中から、人間の命にかかわるできごとを分類しながら抜き出してみました。

自然による災害（天災）

- 3月3日 北海道で暴風雪：道内で9人が死亡
- 4月20日 中国四川省雅安市でマグニチュード7.0の地震：360人が死亡
- 8月9日 秋田県で土石流、6人死亡
- 10月16日 伊豆大島で土石流：台風26号による大雨で死者・行方不明者は39人に
- 11月8日 台風30号がフィリピン中部を直撃：死者・不明者は7700人超予期せぬ人災（事故）
- 2月26日 エジプトで気球墜落：日本人4人を含む計19人が死亡
- 7月6日 アシアナ航空機事故：米サンフランシスコ空港で3人死亡、180人以上負傷
- 7月24日 スペイン列車事故：79人が死亡
- 8月15日 花火会場で爆発：京都府福知山市で3人が死亡、50人超が負傷
- 10月11日 福岡・博多の安部整形外科で火災、10人死亡第三者には予期できなかったが、意図された人災（殺人事件等）
- 1月16日 アルジェリア人質事件：日本人を含む外国人人質37人が死亡
- 2月28日 東京・吉祥寺の路上で女性刺殺される
- 4月15日 ボストン・マラソンでテロ：爆弾で3人死亡、200人以上けが
- 8月21日 シリアで化学兵器使用：ダマスカス近郊で1400人以上が死亡
- 9月9日 トルコで邦人女子大生2人死傷
- 10月28日 北京・天安門前に車両が突入、炎上：40人余りが死傷
- 12月19日 餃子の王将社長、撃たれて死亡

2 2014年を想う（2014年への期待）

同日朝日新聞15面には、「2014年の主な日程」が記載されていて、今年、どんなことが起きるか、特にスポーツについては、大体把握することができます。2月にはソチ五輪が、3月にはソチ・パラリンピック、6月にはサッカーW杯ブラジル大会など、今年ならではの大きなスポーツ行事が予定されていて、世界的にも盛り上がりが見込まれます。自分の国や応援している国の選手が活躍すれば、嬉しくなり、感動します。

1で述べた、昨年のできごとの関連では、シリアでの化学兵器使用については、1月にシリア和平会議がジュネーブで開催されました。シリアで、多くの人々が亡くなることがないように、1日でも早く和平がもたらされることを期待したいです。天災関連では、気候変動対策に関する大きな会議が複数開催されることが注目されます。3月に横浜で開催される国連気候変動政府間パネル（IPCC）や、9月にニューヨークで開催される国連主催の気候サミット、10月にコペンハーゲンで開催される会議（IPCC統合報告書の公表）、そして、12月にペルー・リマで開催される、国連気候変動枠組条約締約国会議（COP20）です。これら一連の会議で、温暖化対策で大きな進展が見られることを期待したいと思います。

昨年、自分の周り、日本、世界で起きた悲しいできごとを思いながら、今年のことを考えると、楽しい、嬉しいことはある程度予想できるかもしれないが、命を失うような事件・事故については、予想は非常に困難なように思います。

3 2013年のできごとから学ぶ

予想困難な事件・事故が起きないようにするには、天災については、気象予報、地震予報の精度を上げる、住民への周知の迅速化が、人災については、鉄道・航空機の安全確保対策、治安対策の改善など、抜本的な対策が担当組織によって取られるべきでしょう。しかし、それには時間がかかってしまうため、自分や自分の周りの人を守るためには、今すぐにできる対策は、「自分（たち）の身は自分（たち）で守る」という心構えで、一人ひとりが、毎日の生活の中で、できることを考え、行動に移すことだと思います。

天災のうち、大雪や台風については、自分たちが居る場所に起こるかもしれない天災による被害を想定してみる、いざという時の避難場所・方法を考えておく、危険が近づきそうな時は気象情報をこまめに確認するといったことが考えられるでしょう。地震については、事前情報の入手は困難ですが、地震被害を少なくする工夫、いざという時の避難方法が考えておくことができます。

殺人事件等といった人災については、防犯情報を日頃から把握しておく、自分の周りの危険個所を把握するようにする、暗い場所を一人で歩く時は、速足で歩く、いつも歩く経路は時々変えるといった工夫ができるかもしれません。

事故という人災に対してが、個人での対応が最も困難かもしれません。航空機や列車に乗る時には、事故発生の可能性も頭において、私たちはどうしたらいいのでしょうか。今の私に考えられるのは、特に外国で航空機、列車に乗る時には、そのことを、第三者（家族や旅行代理店等）に知らせておくことくらいですが。

4 最後に

さまざまな危険（事件事故だけでなく、病気も含めて）に対して予防策を練っても、いざという時には、人間にとっては、どうにもならないのかもしれませんが。このようにあきらめてしまうのではなく、できるだけ工夫・知恵をしばりながら、そして、生きている自分にとっての今日という一日、一瞬に感謝し、周りの人々に対しても、「一期一会」という感謝の気持ちで接し、毎日を送りたいと思います。人命が最も重要であると多くの人に再認識していただき、天災、事件、事故が少なくなるだけでなく、武器を伴う紛争が少しでも、早急になくなることを、今年2014年と、来年以降にも期待しています。



沈黙の効用

新潟医療福祉大学言語聴覚学科講師
大谷大学大学院文学研究科博士後期課程在学
栗崎由貴子

私たちは日常に埋没している。普段の私たちは、日常が滞りなく無事に過ぎていることを意識することなく、その安寧にただよい、時にその退屈さにうんざりしながら毎日過ごしている。

こうした日々は、震災や病気、事故といった「ある日突然に」見舞われる非日常の出来事に遭遇したときに、それがいかにかげがえのないものであったかということを感じ知らされる。非日常の中に身をおいたとき、それまで特に意識されることのなかった日常は急激に大きな存在感をもって立ち現われてくる。そして、そこに戻ることはもはや容易ではないことを自覚させられるのである。

東日本大震災は、私たちに日常の不確かさをつきつけた。その震災からもうすぐ3年が経とうとしている。地震発生当時、私は被災地近くに住んでいたので相当の揺れは体験したものの、生活そのものは影響を受けなかった。しかし、被災者と呼ばれることのない私でさえ、あの日を境に何かを失ったように感じる。いまだにあの瞬間に閉じてしまった心をどうしても解放することができない。3月11日に奪われてしまったものはあまりにも大きく、悲惨で、あいにく私はそれを受け止めるだけの覚悟を持ち合わせてはいなかった。以後、震災に想いをはせようと思うたび、なぜか私の心は急にブレーキを踏んでしまう。考えることも語ることもままならない。なぜ私の心は止まってしまうのかを自分に問うことすら躊躇する日々を過ごしてきた。ただ、3年という時を経て、まるで氷が溶けるさまが春の訪れを告げるように、自分の心のゆらぎが光の方へと導かれていると感じるときもある。

生きてると、「ある日突然に」という出来事が必ず起きる。日常が止まってしまう最たる出来事は死だ。明け方の電話が必ずといっていいほど訃報を告げるように、さっきまでの平穏な時間は、ある出来事の到来によって瞬く間に非日常と化す。むろん、死を避けることはできない。誰かが先に逝き、誰かが後に残されるという事実は、万人に平等におとずれる出来事である。しかし私は、大震災が起こってから、誰かがこの世から突然いなくなってしまうという事実、今ある日常が予期せぬ事態によって失われてしまうという現実を直視することができなくなってしまった。

未曾有の大震災によってもたらされた悲しみや絶望、喪失感は澱となって心の奥深くに沈殿してゆく。でも私たちは生きなければならない。澱を払いのけるためには否が応にも現実と向き合わねばならない。残された者には全うすべきことがあるのだと心を奮い立たせなければならない。だが、事はそう簡単にはいかない。「意を決して前に進まなければならない」という誓いを掲げなければならないこと自体がすでに非日常である。一步を踏み出そうとする頑張りそのものが、弱り切った心に刃となって切りかかってくる。受け入れ難い突然の出来事に見舞われた瞬間がイメージとして湧き起ってくるだけで、心が切り刻まれるように苦しいときもある。私たちは、そこから抜け出して一日でも早く日常を取り戻そうともがけばもがくほど、日常を目指している今の自分は非日常に生きているのだと思知らされてしまう。

果たして、前に進む努力をし続けることができるほど人の心は強いのだろうか。現実に向き合うことなく心に蓋をし、目を閉じ、耳を塞ぎ、想像力も語りもどこかに追いやって、ただその場に黙ってうずくまり続けることは赦されないのだろうか。

東日本大震災の発生直後、日本にはさまざまな言葉が飛び交った。私たちは報道を通して様々な言葉に触れた。中には現地で自然発生的に出てきた言葉もあった。私たちはそれらの言葉に感動し、共感し、言葉を介して皆が共に在ることを伝えたはずだ。被災者は孤立していないのだということを伝える術として、これらの言葉は一定の役割を果たしたであろう。だが、ほどなくして、様々な言葉はただの騒音と化したように思う。時が経つにつれ、「絆」や「がんばろう」という言葉は空々しく頭上を通り過ぎてゆくようになった。消えゆく声に抗おうと誰かが声高に叫べば叫ぶほど、言葉は単なる標語に成り下がり、その虚しさはつのっていった。次第に言葉は棘をもちはじめ、優しさや励ましの気持ちを伝えようとする言葉でさえ、容赦なく心に突き刺さった。その言葉を補うために新たな言葉が生まれると、それもただちに騒音になってしまった。喧噪に満ちた討論は酷薄さを増し、言葉の負の連鎖に終わりが見えなかった。

被災地では「カウンセリングお断り」という貼り紙をみかけたと聞く。私たちは、かつての阪神・淡路大震災の経験から「心のケア」が大切であることを知ったはずだ。自分におこったことを語り、それを専門家に聴いてもらう。予期せぬ出来事で日常を失った人たちにとって、専門家が構築する「語り一聴く」の関係は救いの手であったはずだ。しかし、この取り組みは東日本大震災に被災した一部の人たちにとっては受け入れがたい支援となってしまったようだ。

言葉が弱りきった心を射抜く凶器になってはならない。しかし、私たちは、この3年間、想いの届け先を熟慮することなく、宛先不明の言葉をとめどなく生産し続けたのではなかったか。おそらく私たちは言葉の力の限界を知らねばならない。とめどなく紡ぎだされる言葉の危うさを知らねばならない。『沈黙の世界』の著者マックス・ピカートによれば、希望は言葉が沈黙とともにある時にもたらされるという。彼は、人間が人間として存在できるのは言葉の力によるものだとした上で、その背景には沈黙がなければならぬと考察している。沈黙こそが精神の自然の土台となり得る。むしろ、沈黙は非生産的で、そこからは何一つとして出はこない。しかし、沈黙にはどんな効用価値のあるものよりも治癒力や援助の力がある。沈黙は何も生み出さないが、無ではない。言葉を発する助走段階でもない。言葉は沈黙によって裏打ちされ、縁取られていなければならないのだ。ピカートは言う。「ただ単に何らかの他の言葉から由来したにすぎない言葉は、固くて棘々しい。そのような言葉はまた孤独である。……この沈黙の追放は、一つの罪となって人間のなかに宿っている。そして、その罪が憂鬱となって現れるのだ。」

言葉は混沌を明確へと導く作用をもつので、思い起こされて語られた途端に現実が立ち現われてくる。したがって、新たな日常を編み直す作業に言葉の力は欠かせない。しかし、人にはどうしても「語れない」ときがある。それは、語らない、という能動的な消極ではない。言葉を喚起することへの恐怖、沈黙を打ち破る恐怖が拭えない状態だといえよう。自分の置かれている状況を克明に理解することが残酷なときもある。辛い現実を直視できないのであれば、あえて言葉にしないという選択もあるのではないだろうか。もちろんここには具体的な言葉の操縦のみならず、語りを前提に整えられた場面を避けることも含まれる。相手の心を汲みとろうと意図して誰かの傍に近づく。それは優しさである。しかし、自分が語らずとも誰かがただそばにそっと寄り添ってくれる、その優しさが与えられているという事態こそが非日常なのだ。「今は語れなくてもいつか語ってくれるだろう。その時まで待ちましょう」という優しさは、時に「いつか語りなさい」というプレッシャーとなって相手を感じがらめにしてしまう。それほどまでに私たちは、自分の想いは誰かに伝えるべきだという義務を背負わされているのである。

しかし、辛い現実から逃げ続けるために、言葉を喚起することを止め、語れない想いをそのままに、うわつらだけでもいいからただ淡々と、普段通りの日常を過ごしたいと願うときがある。それが虚構の日常だとわかっている、まるで「私には何事も起こっていないはずだ」と信じ続けるかのよように、ただ黙々と。

現実には立ち上がることも立ち向かうこともせずただただ黙ってその場にうずくまっている、その行為そのものが救いになる時間というものがあるはずだ。振り返ってみれば、乗り越えることも這い上がることもしなかったけれど、なんとかやり過ごしてきた道筋がある。その日々がただただ無為に積み上げられたものでしかなかったとしても、その時間の中でしか得られなかった救いがあるはずだ。まるで、絵画や音楽が何も語らずとも心の中に静かに染み入るように、沈黙が導く希望があると信じたい。

今年は、というよりは、今年も。そして必要ならばいつまでも。目を閉じ、耳を塞ぎ、沈黙し続けるしかない心の弱さを赦し、赦される年であって欲しいと願う。語ることも語られることもなく、聴くことも聴かされることもなく、平凡な毎日に埋没したがる心をそっとそのままにしておける、ゆるやかな時間が与えられ続けることを願う。

生命倫理と脱原発のこれから

— 進歩する科学技術との共存には冷静に判断を —

村上恒夫

ノーベル賞の山中教授のIPS細胞の研究、最近では女子力全開の研究者STAP細胞の小保方さんが注目されている。再生医療などが現実のものになろうとしている。生命の深遠に科学が、さらなる一步を踏み入れてきた。

人類は、生命の神秘に畏怖して宗教を生み出した。多くの宗教は、生命の神秘を神の領域として、人類が科学の名において、その秩序を乱すことを冒瀆としている。宗教だけでなく、一般的に生命倫理の範疇として、研究活動に厳しい目を光らせている。

傷んだ体が再生し、さらなる寿命を獲得することが可能になる。若返りも夢ではない。人は死ななくなるのだろうか。

もし、人類が不死を手に入れたとしたら、それは人類にとって、幸せなことなのだろうか。大金持ちは不死を手に入れ、貧乏人は死んでいくのだろうか。いや、労働人口が欲しいので、人工的に労働者を生み出すのだろうか。

これらの話は、決して、ただの夢想ではない。どのみち人類は、約500万年後にy染色体の劣化により男性が生まれなくなる。その時は死滅するか、クローンを作るかしか道が無い。あまりにも遠い未来なので考える必要がないと言えるのだろうか。計算上が500万年なので、実質的には表現型の確認は早まるだろう。

もしも、将来の人類に責任を持つのが人類ならば、答えは明らかではないだろうか。科学技術をさらに進めて、生命の神秘を白日の下にさらし、神から奪い返すことが人類の務めであろう。

問題は、科学技術の追求ではない。未熟な力で傲慢になり、我を忘れて力を揮うことである。科学者は謙虚になり、自分の無知と常に向き合うことが必要なのだろう。神に比べれば人類など恥知らずで無知な輩以外の何者でもあるまい。

科学技術が進めば、人類が幸福になる。確かにそうだが、科学技術が進歩しただけでは幸福にはなれないのも事実だろう。人口増加に伴う、経済、食糧問題など問題は山積みされる。社会科学の発達も度外視できない。

最近では脱原発の意見が多いそうだ。今回の都知事選挙にも、その問題が指摘されている。脱原発を叫ぶ人々は、本当に将来を考えているのだろうかと疑問に思う。原発を0にすると言うことは、新しい技術者が育たないことを意味している。日本の原発が優秀なのは、多くの技術者が育成されたからである。若い人々が原子力に未来を感じ、その世界に飛び込んできたが故である。

しかし、脱原発、原発0に未来を感じるか。答えは明白だろう。これからなくなる産業に誰がわざわざ勉強し、大学で研究するのだろうか。原発を廃炉にするにも、これからの放射性物質の管理にも多くの技術者が必要なのは明白な事実である。彼ら原発反対を叫ぶ方々は、原発の事を真剣に考えているのか、非常に疑問であり、無責任に感じるのは私だけであろうか。

確かに、原発のコストが安いとされるのは、誘導された計算上の話であり、実際のコストは遥かに多額である。それは、将来の人間が払うべき大きな負債として残される。放射性廃棄物の問題は決着を見ていないのが現実である。

しかし、廃炉にして、一万人規模の人間が働く場所に人間がいなくなる。維持管理し、警備する人間が残るのみ。この現実を受け止めることが果たしてできるのだろうか。脱原発を図るなら、核物理学や核管理技術者に希望を与える何かを与えなければ道は見えないのは明白であろう。核を扱う技術者が40年後すべてリタイアする。その現実をどう受け止めるのだろうか。

脱原発にはそれだけ多くの問題があるのに、この問題を指摘する人は少ない。放射性物質は危ない。だから、原発をやめて、自然エネルギーなのだ。

では、脱原発の過程はどうするのだろうか。そのストーリーはどのようなものなのか。誰もが人任せなのではないだろうか。原発を推し進めた人々の無責任さと何処に違いがあるのだろうか。

人類が手に入れた偉大な科学技術。これは、まさに「神の手」であろう。人類はこれを、これからもさらに高めていくであろう。それには、感情的な批判や盲信することは非常に危険な行為である。冷静に受け止め、科学的に、そして人文科学的に批判しサポートしなければならない。科学技術を抑制できるのは、科学技術のみである。いくら泣き叫んでも、科学技術が無ければ止められない。

人類は神ではない。ただの人である。常に謙虚に揮わねば自らの拳で、鉄槌が下されるであろう。



電子書籍の未来

小笠原 裕

2010年頃から徐々に立ち上がってきた電子書籍も、ようやく「それほど新しもの好きでもない」人々にも受け入れられるようになってきたようである。

筆者も、本格的に電子書籍を購入し始めたのは2012年の半ばごろであるから、どちらかと言えば後発のほうであろう。

しかし現在、筆者のタブレットやスマートフォンには、アプリ版のKindleをはじめとして数種類の電子書籍アプリがインストールされていて、格納されている書籍は数百冊を超える。もはやそれなしではいられないほど、電子書籍は筆者のライフスタイルに浸透してしまったようだ。

電子書籍については、当初からその是非・功罪や、紙の書籍擁護論といったものが論じられ続けているが、およそそこに情報がある限り、電子化・IT化されないものはありえない。まして、書籍は多くが文字と言う、比較的電子化しやすい情報で構成されている。こういった点からも、書籍の電子化・IT化は宿命とっていいだろう。

ところで電子書籍の衝撃があまりに大きすぎて、そのうち人は文字も音声も捨て去って、脳に直接信号を送ることで意思疎通をするようになるのでは…と夢想してみたりもするが、人間が意思疎通をするには、当面は多くの場合特段の拡張を必要としない、自らの感覚機器を用いる状態が続くと考えられる。その意味では、やはり視覚が情報の伝達効率という点でもっとも有望であり、したがって文字や画像を使ったメディアは当面はすたれまいと思われる。

問題は、その文字や画像が紙に載っているか、画面に載っているかの違いであって、現時点の電子書籍端末は、あえて言うならばほぼ紙の本と同程度にまで使い勝手が向上してきたといえる。

ここでは、この電子書籍が向こう1年、あるいは2～3年の間にどんな恩恵を我々にもたらしてくれるメディアとなっていくか、に思いを馳せてみようと思う。

赤木昭夫氏は、『書籍文化の未来 電子本か印刷本か』というブックレット（岩波書店、2013）で、電子本の利点を7点挙げている。

それらは、1. 入手の容易さ（アクセシビリティ）、2. 可搬性（ポータビリティ）、3. 更新可能性（アップデートビリティ）、4. 規模（スケール）、5. 検索容易性（サーチャビリティ）、6. 相互参照可能性（インターテキストュアリティ）、7. 記号・文字・映像と多様な表現媒体の組み合わせ（マルチメディア）である。これは、現時点での電子書籍の利点を網羅したものと言えることができる。

本稿では、これらをさらに発展させて、今後の電子書籍の発展のヒントとなるものがあるか考えてみようと思う。

■一覧性

上記で挙げられた電子書籍の利点の一つに、可搬性というものがある。一台の端末に、何十冊もの本を入れて持ち運べる便利さは、一度経験してしまうと手放せるものではない。

ただ、なぜか現在の電子書籍端末は、どれも一度に一冊しか書籍を表示できない。学生時代に、レポートを書くために、付箋だらけの文献を床いっぱい広げて、それらの間をあちこち彷徨いながらようやく一作を仕上げた、というような経験を持つ筆者としては、一度に数冊、同時進行で読めれば便利だろうと感ずることがある。

今年の後半以降、今よりも大型のタブレットが発売されるという噂もあるが、そういった大画面を持つ端末では、たとえば4冊や9冊を同時に画面表示して読み進められる書籍アプリが提供されれば便利だろうと思う。あるトピックに関連する箇所を複数の書籍で開き（そのうちいくつかは同じ書籍の複製でもよい）、全体を俯瞰、比較しながら着想を得る、といった知的生産ができる可能性がある。

あるいは、こういった用途には据え置き型のパソコンと、それに付随する大画面モニターを使うほうが合っているかもしれない。パソコンの世界では当たり前のようにある「マルチタスク」機能を、電子書籍にも適用すればいい。この場合、電子書籍の利点に、現時点ではない「一覧性」とでも言うべきものが加えられるのだと思う。

■消費か長期保管か

電子書籍は一過性の読書、消費する読書に向くという考えがある。

確かに、週刊誌や電車の中で気軽に読みたい本は、電子書籍の得意な領域であろう。一度読んだら、もう一生二度と読まないという本も多い。

しかし一方、「一部分を読んだけれど、その後はずっと『積ん読』状態で、忘れた頃にまた読み返す」と言った用途にも、意外と電子書籍は合っているのではないかと思う。

コンピューターの世界では、日々生産されるデータへのアクセス頻度が一番高いのは、そのデータを作成した直後せいぜい1日か2日であり、その後は急激に頻度が低下する、ということが良くある。

しかし1年、2年と経つうちにまたそのデータが必要になって、思い出されたようにアクセスが発生する。その目的は、監査であったり季節ごとの要請であったりと様々だが、ともかくもこういったデータを長期保管することを、コンピュータ用語でアーカイブするという。これは、公文書館や資料館を英語でアーカイブと呼ぶのとまったく同じ意味である。つまり、普段は利用しないけれども大事なのでずっととっておく、という情報の使い方をアーカイブと呼ぶのである。

情報へのアクセス頻度と似たことが書籍の場合にも起こる。つまり、一番その書籍を読みたいのは実は買った直後（あるいは買う直前）であり、家に帰って机の上に置いておくと、時間が経つに連れて急速に読む熱意が薄らいでいく。このあたりは個人差もあると思うが、しかし棚にあるのを見つけると、ふと読んでみる、というようなことはよく起こることだろうと思う。

ここで何が言いたいかというと、情報の長期保管とITは親和性が高いのである。たとえば実体のある本を何十冊も『積ん読』しておくのは、床面積的な事情からも困難が伴うが、電子の世界ではいくらでも『積ん読』ができる。あるいは、適当な時期に、自分の蔵書をつらつらと見直せるように、最近読んでいない本を見繕って画面で教えてくれる、そんな電子書籍が出てきてもいい。

■書店の役割

最初のほうで複数の本の話が出たので、視点を単体の本から離して、本の集合体に移してみる。本が集合しているところといえば、やはり書店と図書館であるが、これらについて今後の役割がどうなるか考えてみる。

書店というのは、いわば一つのテーマパークのような楽しさを提供してくれる場所でもある。なぜ楽しいかといえば、電子書籍との対比でいうならば、書店では、自分の体を使ってその中を自由に探検できるからだと思う。

本に対して、我々は普段もつばら目と手を使って接しているが、書店に入ると、それに加えて全身の肌感覚とでもいうべきもので本に接しているという実感がある。

目で見るといっても、周縁視野に入ってくる、つまり意識して注視していない情報も入ってくるのである。これは電子書籍と一対一で対峙しているだけでは、なかなか得られない経験である。

このことから言えることだが、紙の本の利点は、その存在感である。紙の本には厚みがあるから背表紙が存在し、背表紙があるからそれが書棚にずらりと並ぶ空間を構成できる。

本の並べ方には基準はあるが、書店のポリシーも反映されるだろう。新刊書のコーナーでは、普段自分の興味のない分野でも、どんな傾向の本が読まれているかを感じることができる。自分のポリシーでだけ本を選ぶ電子書籍では、得られない体験である。

将来、電子書籍に紙の本が駆逐されてしまって、この空間が失われては一大事である。たとえ紙の本がなくなってしまうとしても、その場合は電子書籍を印刷して製本して並べるという、一見本末転倒のように思える行為をしてでも、この空間は後世に残すべきもののように思う。

■読書で世界と繋がる

前述の電子書籍の利点の中に、相互参照可能性というのがある。

赤木氏の定義では、これは文書間でのハイパーリンク、すなわち複数の文書間で関連する項目や記載の間を自由に行き来して表示できるということであるが、これを違う切り口で見ると、複数の読者が興味を持っているポイントを共有できることにつながる。

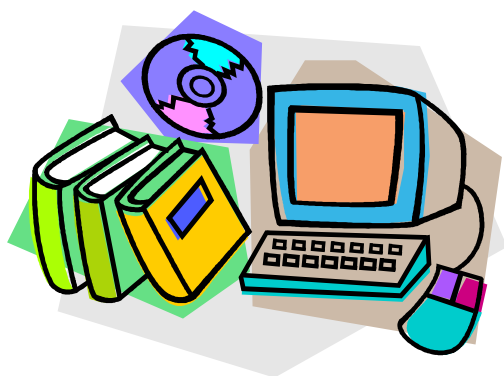
インターネットを通じて、自分のウェブブラウザのブックマークを他人と共有することはすでに行われているが、自分が重要と思ったところに傍線を引けば、それが世界中の読者と共有できるといったことも、現在の技術で実現可能である。この本のこの箇所には、全世界で何万人が傍線を引いています、という具合である。

学生に対して、テキストから課題を出す教師からみると、頭の痛い問題かもしれない。しかし、これによって教育分野ではむしろ学習者が勤所を共有することができる。知の集合のおかげで、学習の速度が向上するかもしれない。あるいは、研究者にとっては先行研究の扱っていないところを見つけやすくなるかもしれない、それはそれで興味深い効果をもたらしそうである。これも、昨今はやりのビッグ・データのひとつの活用例ということもできるだろう。

以上、現状のIT技術で十分実現できる範囲での、電子書籍の未来について想像してみた。

すこし考えるだけでも、電子書籍が我々のライフスタイルを大きく変えるポテンシャルを持っているものであることが分かる。

これらのいくつかでも、近い将来実現して、我々の読書文化がより成熟していくことを楽しみに、筆を措くこととする。



軍の操り人形となった金正恩

宮田敦司

12月13日に金正恩の後見人でもあった張成沢が機関銃で銃殺された。通常、銃殺は小銃で行われるのだが、国民への宣伝のために機関銃が用いられた。

張氏の処刑を伝える北朝鮮メディアは、張氏が「政権への野心」に狂ってクーデターを起こそうとしたと糾弾。「党と国家、軍隊と人民は金日成、金正日、金正恩同志以外は誰も知らない」と強調した。張氏は2011年11月12日に金正日総書記が死去した直後から、若い正恩氏を支える形で事実上のナンバー2となった。正恩氏の意向に異議を唱えることもあったとされ、正恩氏はその権力の肥大化を恐れていたとみられる。北朝鮮では金日成主席、金総書記の時代も、権力を持ちすぎた者は失脚・粛清の憂き目に遭ってきた。

しかし、こうした実力者の処刑が北朝鮮の発展を大きく阻害してきた。独裁者に意見する大物がいなくなってしまうからだ。ブッシュ政権時代に対北朝鮮政策に携わったジョージタウン大のビクター・チャ教授はCNNテレビに「これほど恐ろしく劇的なことは、金日成主席が権力を固めようとしていた1950年代以来だ」と指摘。「(金正恩第1書記に権力が安定的に移譲されたとは言えず、体制内で大きな内部抗争が起きている)」との見方を示した。

崔竜海・軍総政治局長はあくまでも軍人の思想を取り締まる部署の長であり、部隊を指揮することはできない。部隊を指揮するのは総参謀長だからだ。ただ、階級に関係なく軍人を逮捕することが出来るため総参謀長といえどもうかつに総政治局長にたてつくことはできない。

金正恩のもう一人の後見人といわれた李英浩総参謀長は2012年7月に「病気のため」という理由で全役職から解かれた。北朝鮮の権力闘争を見ていると、「出世欲」⇒「私利私欲」という図式が成り立つように思う。これは、食糧をはじめとする生活必需品が不足している北朝鮮ならではの図式ではないだろうか？

軍人である崔竜海が事実上、金正恩を操る立場になることで、崔竜海派は優先的に物資の供給を受けることができるようになった。その反面、張成沢派は配給停止など冷や飯を食うことになるだろう。

強硬派である崔竜海が権力を握ったことで、核開発や弾道ミサイル発射実験が加速するのではないかと分析もあるが、特に加速することではなく対米交渉のカード作りのために、むしろ緩やかに進められるだろう。なぜなら、核兵器は実際には完成していなくても「持っているかもしれない」と相手に思わせることが重要だからだ。

核開発施設である寧辺で核施設が再稼働を始めたという報道がたまにある。しかし、寧辺では核開発を行っていないと筆者はみている。筆者は以前、核施設疑惑のある地下施設の写真を全て見た。山岳地帯である北朝鮮中部から北部は地下施設を造るのにうってつけである。具体的には北朝鮮中部の深い山岳地帯にある下甲(ハガブ)の施設にウラン型の核兵器を造る施設があると考えている。

つまり、施設が老朽化した寧辺は、交渉カード作りのためのデモンストレーションを行うための施設なのだ。ボイラーから水蒸気が出ただけでマスコミは騒ぐが、それこそ北朝鮮の思う壺なのである。

話を戻すと、カリスマも実績も何もない金正恩は、最後に「失政」の全責任を負わせるためにトップでいてもらう必要がある。今後も形式上「生かされる」だろう。何もかも立ち行かなくなった時に、張成沢のように機関銃で銃殺される運命なのである。言葉は悪いが金正恩は崔竜海にコントロールされる「バカ殿様」というわけである。

燃料不足でもはや韓国と戦えなくなった軍隊に必要なことは、「自給自足」であり共同農場や駐屯地での田植えなどの農作業なのだ。実際に戦車を操縦したことがない戦車兵、基礎的な飛行しかできないパイロット、片道の燃料だけで韓国に突入する戦闘機、米空母に突入するミサイル艇などなど、北朝鮮軍は戦わずして末期の旧日本軍の様相を呈している。

そのトップが崔竜海総政治局長であり金正恩なのだ。様々な憶測を呼んだ張成沢の粛清だが、北朝鮮は自力では何も変えようがないほど没落した国家であることには変わりがない。配給制度が廃止され心身ともに疲れ切った国民には、雲の上の権力闘争など関心がないだろう。今にも何かが起きそうな勢いで騒いでいるのは外国メディアだけである。

編集後記

〇・・・「将来予想を書いてもらえませんか」。年明けて早々に思いつきで会員の皆さんに気軽にお願ひしてしまった手前、こんなことをいうのは申し訳ないが、自分なら「勘弁して！」と逃げてしまう。何しろ将来のことなんて、ちょっとしたきっかけで全く予期しなかった結果に終わるのが常である。私のような凡庸な市民の予想なんて当たる筈もない。それでも将来を予想することは夢があって楽しい。気の合った仲間同士でうまいものを食べながら話が弾むと、少しばかり気が大きくなって侃侃諤諤の議論をする。しかしながら、私の予想は的中した試しがない。

まして災害の予測は難しく、万全な対策を整えるのは容易なことでない。内山さんが昨年主な災害や事件を列挙した一覧を見てみると、一年中いつでもどこかで災害や事件が発生しているように思える。私自身はこれまで災害や事件に遭ったことがなく、実際のところ危機感はない。しかし、これまで災害と無縁だったというのは、単に運がよかっただけなのかもしれない。内山さんが、自然の前に人間は無力であると諦めず、また事件事故、紛争がなくなるよう、できる限りの工夫と知恵を絞る必要性を静かな筆致ながら強く訴えるのももっともだ。

〇・・・東日本大震災の時は、被災者の悲しみや苦痛を我がことのように悲しみ、全国から大勢の人々が被災地に入って救いの手を差し伸べた。しかし、悲しんでばかりいないで早く立ち直って、と傍にそっと寄り添い励まされることが、実は却って被災者を傷つけたり、重荷になったりすることもあるのだと、栗崎さんは気づかせてくれた。

私には三陸海岸沿いの町に実家のある友人がいて、地震発生後心配になってメールで安否を尋ねた。すると、津波で実家が流されて家族が犠牲になり、家も財産も総て失った、今は何も希望が持てないという悲痛なメールが返ってきた。出来る限り力になるから何でも相談して、とすぐに返信したのだが、友人からの連絡はそれっきり途絶えた。こちらから何度メールを送っても反応はなく、彼がどうしているのか今に至るまで全く分からない。それが栗崎さんの指摘と重なって見えた。

〇・・・震災は福島第一原発の事故により、日本のエネルギー政策そのものまで揺るがした。原発維持か脱原発かの議論の中で、みんな肝心の論点を忘れていないか、と問いかける村上さん。脱原発となれば若者が原子力に未来を見いだせず、魅力を感じなくなって原子力を学ぶ気がなくなり、優秀な日本の原発の技術が受け継がれなくなる。故に原発ゼロという選択肢はあり得ない、という。みなさんにも賛否両論あるだろう。

一昨年、原発存続の是非を考える、ある集會に誘われた。パネルディスカッションが始まり、脱原発運動をしている女性が活動について話をした。最初聴衆は訴えを熱心に聴いていたのだが、女性の次の発言により、この後の質疑応答は本題から完全に逸れ、聴衆とパネリストの間で激しい論争となった。

「福島第一原発の事故があったにもかかわらず、日本は未だに原発を廃止しない。一方、ドイツは将来の脱原発を決めた。なぜか。ドイツはナチスを反省し謝罪したのに、日本は侵略戦争を反省していない。日本人は過去の過ちを反省しないからなのです」。

司会者が「会場の皆様から何かご質問は」というと、初老の女性の手が拳がり、「私の親戚は戦争に行き、戦地で餓死した。侵略軍の兵隊が餓死するなんてことありますか」と泣き出さんばかりに声をはり上げた。これに壇上の別のパネリストが「それは日本軍の兵站の問題。日本の戦争なんて全て侵略戦争だ」と応じると、聴衆から次々と手が拳がって異様な雰囲気となり、司会者が慌てて集會を打ち切った。

これは極端な例だが、原発の問題はどうも保守と革新、もっとはっきり言えば右と左の対立の構造になりがちである。原発存続の是非は、自民党政権が国策として原発を推進してきたという経緯があるとはいえ、本来は右も左もない話だろう。これではイデオロギーとは無関係に原発問題を考へている人が、原発維持と廃止、どちらの立場にしても色目で見られることを忌避して意思を表明しづらい。残念なことである。

〇・・・話は替わって今回の原稿と全く関係ない話で恐縮だが、昨年12月に開催された当学会の研究発表会の後の懇親会で、腹が振じれそうなほど笑ってしまう出来事があった。

初めて研究発表を聴きに來た新会員が、別件の用事があり懇親会には出席できなかった。そのため帰る前に乾杯前の懇親会場に顔を出し、今回寄稿して頂いた小笠原さんの座っているちょうど後ろに立って自己紹介を始めた。

「小笠原裕といいます」。すると小笠原さんは「ええっ？」と目を丸くして新会員の方を振り向いた。「下の名前はどく書くの？」「衣へんに谷です」。全くの同姓同名だった。独り信じられないという表情の小笠原さん。会場はしばし爆笑に包まれた。

翌日、小笠原さんは、もしも彼と共著で論文を書いたら間違いと誤解され、名前が1つ削除されて1人分だけにされるんじゃないか、と冗談を言っていた。いつか小笠原さんの名前が2つ並んだ共著論文を見たいものだ。

〇・・・特集とは別に、常連の宮田さんが北朝鮮の現状を分析した原稿を寄せてくれた。

話し方と同様、文章には人それぞれの個性が表れる。宮田さんと面識のない人は彼の原稿を読んで、一体どのような人物像を思い浮かべただろうか。以前にもここに書いたが、宮田さんは意見がぶつかっても口調は変わらず、ゆっくりと静かに、というより、ほそっと自説を述べるタイプである。しかし、研究論文以外のこの手の原稿となると、別人のように表現が激しくなりがちである。口調と論調の“言文不一致”が彼の持ち味だ。

みなさんの個性を念頭に置きながら、研究論文とはまた違った原稿を依頼するのは面白かった。私のニュースメール担当は今回が最後になる。研究や仕事で余裕がないところ、無理な執筆のお願いに協力して頂いた学会員の皆様に、心より感謝申し上げます。

佐藤勝矢